様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２００３１

研究課題名（和文）デリダの「差延」概念再考

研究課題名（英文）Derrida's concept of "Differance"

研究代表者
藤本　一勇（Fujimoto, Kazuisa）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：７０３１８７３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：脱構築思想を普及させたフランスの哲学者ジャック・デリダ（1930－2004）の基礎概念である「差延」は、伝統的な哲学における時間と空間の概念を変形し、両者が一体となり循環しあう関係を示す戦略素である。この概念を軸に、言語記号、テクスト、経験、情報、テクノロジー、政治権力など広範なデリダの思想を整理・読解し、彼の多様な思考の根底を「差延」というモチーフが貫いていることを明らかにした。その結果、初期の理論的段階、中期の文学的段階、後期の政治・倫理的段階を、表面的な変化にとらわれず、一貫したものとして把握することが可能となり、翻って同時代の多様な環境との相関関係を理解することを可能にした。

研究成果の概要（英文）：The concept of “differance” is fundamental to the philosophy of Jacques Derrida (1930-2004) who established the movement of “deconstruction.” First of all, our analysis focused on the theoretical aspects of this concept, for instance, time and space, being and becoming, idea and reality, in order to clarify its meaning for the deconstruction of the tradition of Western philosophy. Secondarily, we saw that the motif of differance is the center of various problems Derrida treated, language, signification, text, experience, technology, politics and ethics, etc. Finally, these analysis allowed us to totally understand the strong coherence between Derrida’s theory and practice, his thought and action, in front of our contemporary situation after the World War II.

研究分野：哲学

キーワード：脱構築　時間論　唯物論　民主主義　メシアニズム

１．研究開始当初の背景

ジャック・デリダ（1930–2004）の哲学における「差延」概念の重要性はつとに指摘されてきた。しかしそれが具体的にどのような水準で、どのように論じられているかについて、正確かつ精密な研究は意外にもなされてきていなかった。その結果、デリダの中期・後期における議論、特に「政治的・倫理的転回」と呼ばれることもある変化の意味も、しっかりと捉えられなくなっていた。本研究は差延概念を明確にし、デリダ哲学の問題領域と思想史的文脈のなかに位置づける。

２．研究の目的

先行研究において差延概念の理解が曖昧であった一因は、デリダ本人の議論においても差延概念が単一的に用いられる傾向があり、コンテクストごとの差延概念の腑分けや関係性が曖昧だからである。それはデリダからすれば差延概念の一般性・普遍性を示しているということになるのかもしれないが、本研究はあえて差延概念を、それが使用されるコンテクスト（水準）ごとに腑分けし、差延概念の多数性・複数性を明確にし、コンテクストごとの差延概念の正確な認識と、文脈の異なる差延概念相互の関係性を明らかにすることを目指す。それによって差延概念の肥大化を抑制し、個々のコンテクストにおける差延概念の可能性と限界とを解明する。

３．研究の方法

差延概念が確立される初期の文献（1960 年代～1970 年代）を中心に、文献の精査と概念の分析をおこなった。その際、デリダが扱う他の哲学者・思想家との関係性をつねに考慮し、思想史の視点も取り入れた。先行研究の調査もおこなったが、前述したように、差延概念の複数性を考慮する先行研究はほぼ皆無であるので、基本的にはデリダ当人の文献の分析に集中した。

４．研究成果

デリダの差延概念には少なくとも４つの位相がある。１．記号的（言語的）差延、２．意識的（現象学的）差延、３．時間的差延、４．政治的（権力的）差延、である。以下それぞれについて報告する。

（１）記号的（言語的）差延。この水準の差延が理論的にもっとも精緻に描かれるのは、主にソシュール言語学およびオースティンの言語行為論に対する脱構築のコンテクストにおいてである。ソシュールは言語システムを実体的な辞項からなる体系としてではなく、言語システム内の諸要素の関係性、差異のネットワークの観点から捉え直した。音素にせよ意味にせよ、ある要素の機能はそれを取り巻くその他の諸要素との関係において決定される。デリダはそれを実体や意味が他の項へと絶えず送り返される（転送される）作用としての差延として捉え返し、ソシュール言語学にいまだに残る意味への執着を断つ。またオースティンがその言語行為論において「事実確認的／行為遂行的」という区別を確立し、言語現象における行為遂行性の価値を重視したことを高く評価しつつも、オースティンに残存する文脈による意味の決定可能性、または正常な使用と異常な使用という区別を批判し、言語の行為遂行性は意味決定を可能にする文脈の枠を絶えず逸脱し、そこに回収されない潜在力をもつ点を強調する。「正常/異常」という区別も、文脈による意味のコントロールという性格をもつが、デリダによれば、言語要素は文脈を越境して、間文脈的に作用しうるものであり、完全な意味決定を可能にする文脈の飽和状態は決して訪れることはなく、絶えず「差延」（差異化と延期）にさらされている状態が「正常」である。意味を決定しうるケースはむしろ例外的であり、伝統的な言語論・記号論は、この理論的に截然と整理され、秩序立ち、場合によっては美しくさえ見える「例外状態」を「正常」「標準」と取り違える錯視を犯している。この錯視もまた差延の一効果、代補効果であり、伝統的な理論はこれを「基準」もしくは「起源」とみなしてしまったとデリダは指摘する。

（２）デリダは言語および記号の一般システムを「差延」のシステムとして捉え直すが、その際に問題になるのが、記号システムが作動する場である。もちろん記号の作用には社会性が必要であるが、社会性の土台のうえで実際に記号を操作するのは個々の発話主体である。そこでデリダはシステムの諸要素を利用して活動する主体の場を分析する。そのときに決定的な導きの糸となるのがフッサールの現象学である。フッサール現象学は意識に現象するあらゆる対象とその認識根拠を探究するが、その根底には意識主体の自己分裂、空間と時間の両面における自己の差異化がある。とりわけ後期のフッサールにとって意識の分裂と統一の場としての時間が重要な問題となる。デリダは『声と現象』（1968 年）においてフッサールの時間論を「現前＝現在中心主義」の時間論として批判しつつ、フッサールが時間の流れを現在という源泉点の痕跡の蓄積効果として考えた点を評価し、さらにそれを脱構築して差異と延期の二重運動としての差延として深化させる。分裂にして統合という意識主体のあり方を差延運動として捉え返すことによって、主体は実体ではなく、絶えず流動する差異と延期の効果として相対化されることになる。主体を時間のなかで絶えず生成消滅する運動とみなすことで、デリダはフッサールが引きずっていた近代的な意識主体概念を脱構築し、もはや意識として、自己を完全に管理する強い自己主体として考えられない差延運動という「自己」概念を作り出す。これは「散種」や「生き延び」、さらには後期の「亡霊」の考え方にもつながる考え方であり、また絶えず

自己を作り変えつつ延長していく政治制度としての「来たるべきデモクラシー」の超越論的水準での理論的土台でもある。
（３）意識的（現象学的）差延は必然的に時間的差延に接続されていく（フッサールにおいてすでにそうである）が、この現象学的差延は統合的主体を時間流の残留物として再考させると同時に、時間流自体の非意識性、非人称性、非主体性へと目を向けさせる。この点についてデリダは参照していないが、本研究では、フッサールが書き残し、デリダが捉え直した非人称的時間流としての差延を、ベルクソンの時間論、メルロ＝ポンティの「自己」論（『知覚の現象学』における「コギト論」）、ベンヤミンの「歴史哲学」、さらにはドゥルーズの「差異と反復」（そしてドゥルーズによるニーチェの「永遠回帰」論）などとも接続して、いずれも時間について同じ事態を描いた思考として考えられるという結論を得た。こうした複数の哲学的時間論を通底する見取り図を抽出できた点は本研究の大きな意義だったと考える。
　デリダにとってこの時間図式をさらに深化させた哲学者はハイデガーである。フッサールは時間流をあくまでも意識の事象として考えたが（それゆえに彼の有名な時間論のタイトルは『内的時間意識の現象学』なのである）、弟子のハイデガーはそれを意識を超越した存在の出来事として読み替える。特に重要なのは、ハイデガーにとって、時間が与えられる「瞬間」、フッサールが時間意識の「源泉点」として記述した時間の「出来事」（時間の出来、到来）の瞬間は、現前の場に囚われた意識には決して捉えられず、絶えず現前の場から逃れ去るということである。時間は現前の場を与えると同時にそこを逃れ去る贈与運動として理解される。意識の分裂としての差延が時間軸上の水平的差延だとすれば、ハイデガーの語る時間そのものの贈与は垂直的差延と言える。すなわち、線状的な時間（現在の連続）の場から差異化し、自己現前を遅らせる破断的差延である。ハイデガー自身はこの垂直的・破断的出来事を「第四の時間」や「性起（Ereignis）」と呼んでいる。また「ピュシスは隠れることを好む」というヘラクレイトスの箴言を援用しつつハイデガーが語るのも同じ事態である。
　デリダはこのハイデガーの脱現前的時間運動における差延を、数々のハイデガー論のなかで「退隠（retrait）」の動きとして分析している。デリダは、平板化し硬直化した数直線的な時間や歴史を切断し、新しい開口をもたらすハイデガーのこの出来事論を高く評価している。この出来事論は後期デリダの「メシアなきメシア性」の原型でもあるだろう。しかしデリダは、ハイデガーの出来事が一切の存在者から切り離された虚空から、あたかも神命のように降ってくる点を疑問視する。存在の出来事が予見不可能な突発性をもつことは出来事が出来事であるために必然であるが、しかし一切の存在者から分離されたところに出来事の根拠を置いてしまうと、出来事の出来可能性の在り処が不明になってしまう。最終的にはまったく理解不可能な神的宿命のごとき神秘主義に舞い戻る恐れがある。存在と存在者を峻別する「存在論的差異」に存在の出来事性があるのではない。デリダはむしろ存在の出来事性の可能性を存在者のうちに連れ戻す。より正確に言えば、存在者や存在者の布置それ自体が、確定的な存在規定や意味規定を破断させる素材として、つねにすでに新たな存在の出来事のポテンシャルを担っていると考える。
　興味深い点は、ここにおいて第一の差延すなわち記号的差延で見たシステム内の諸要素がそれ自体としてシステムを逸脱し破断させる潜勢力を秘めているという議論が介入してきていることである。ハイデガーがシステム外の力によってシステムを外から破壊する欲望を抱いている（あるいはシステム外の力を呼び求める）のに対して、デリダはシステムそれ自身の内部にシステム破壊の変形力を求めている。これは晩年の自己免疫性（自己を守る免疫機能自体が免疫機能を破壊すること）の議論に直接つながる点である。ハイデガーの出来事論がある種の神秘的な力、外部の強大な力による全面的革命への志向をはらみ、それが一時のナチス加担の遠因であること、またデリダが教条的なマルクス主義による革命主義に批判的であること、この左右両極の革命主義への批判は、根本的には、あらゆる矛盾を外部の大きな力によって一気に解決・解消しようとする贖罪的・神学的発想に対するデリダの懐疑に支えられていると言えるだろう。デリダにとって革命の力はいまここから切り離された外部から来るのではない。いまここの手元にある素材、存在者から、さらに正確には、存在者たちが他である可能性（潜勢力）から到来する。それゆえにデリダは（特に「来たるべきデモクラシー」論において）、革命力は決して現在＝現前しないと同時にいまここにすでにある、と言うのであり、それが彼の亡霊論的出来事論なのである。
（４）かくしてデリダの初期の差延論は後期の「来たるべきデモクラシー」や「メシアなきメシア性」の議論の土台となっていると考えられる。第四の政治的差延もしくは差延概念の政治性である。差延概念は決して中立的ではない。記号的差延であれ意識的差延であれ時間的差延であれ、問題はなんらかの個体化・個別化にまつわる力の作用（権力作用）である。どの水準であれ関係性のなかで生成する個体化・個別化には必ず作用と反作用、圧力と縮減がつきまとう。関係とは力関係である。身体であれ記号であれ時空であれ（政治・社会・文化は言うまでもない）、力関係でないものはない。差延の思考は力関係における多様な襞を浮き彫りにすることを目指している。差異化はある意味で選別であり、

遅れは格差でもある。差延は最初から力のシステムであり、政治や社会はそれが露骨に出現し、利用される場である。

デリダの政治思想は差延のもつ政治力をいかに大きな権力や制度的な権力に簒奪されないようにするかという点に重点がある。差延は覇権主義にも解放にも、どちらにも転がる。だからこそ差延の構造をしっかりと理解し、より悪くない方向で利用しなくてはならない。第四の差延で見た外部への超越という差延（ハイデガー流に言えば、あらゆる存在者を超越する存在の出来事）は、神的・絶対者的・王権的・例外者的・覇権主義的権力（至高の絶対権力という意味での超主権 hyper-souveraineté）を召喚する危険がある。デリダの後期における様々な政治論や動物論は極限すればこの主権の問いに要約できるだろう。個人であれ国家であれ（あるいはその他の体制であれ）、とにかく自己決定権を掌握する「自己」の論理に立脚する権力の問いである。デリダはこの「自己権力性（自権性）」に対して、自己がそのまま他者となるような、他者としての自己性を導入する。状況や文脈や視野を変えれば、いまここにある同じものがまったく別のものに変身する可能性、個別的なものそれ自身がいま現在所有しているのではないが、しかしそれでも非所有の形で個や環境に憑依している他なる力、これを制度化する唯一の政治システムがデモクラシーである。

デリダの主張するデモクラシーは、構成メンバー一人ひとりを自己というよりも他者として理解する（これは個や自己というものが差延という他者化効果の結果でしかないという第一・第二の差延の帰結である）。他者同士からなる共同体は他者性をその究極の共通概念とするのであり、他者性において万人は平等である。したがって他者性を破損するような事態をデモクラシーは容認できない。例えば、政治・経済・法律・軍事等々における権力の独占（我有化・私的所有化）は許されない。選挙、ローテーション、くじ引き、討議といった民主制のツールの意味もここにある。これらのツールは差延を実装するためのものである。独占の許されない他者性の原理は普遍的な差延を命じるのであり、差延の独占はもはや差延の名に値しない。その意味でデリダの描く来たるべきデモクラシーは差延のコミュニズム（共有主義）という性格をもつと考えられる。

以上に要約したように、本研究では差延の四つの位相を中心に、それらが個々にいかなるもので、相互にどのようにかかわるかを解明した。とりわけ伝統的にもっとも根源的とみなされてきた第四の差延に対して第一の差延がもつ本質性とその政治的含意を明らかにできたことは大きな前進だった。また従来倫理的次元に議論が集中してきたきらいのあるデリダの他者概念（これは結局差延と同じ事態を指す）のもつ政治性を明確にした点も本研究の重要な成果であると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 藤本一勇、「他者性の分有。計算不可能なものの計算」、現代思想 43-2、査読無、2015、pp.229-243。
② 藤本一勇、「テクノロジーと来たるべきテクスト」、思想 1088、査読無、2014、pp.262-278。
③ 藤本一勇、「時間の脱構築」、早稲田大学文学研究科紀要 59 輯第三分冊、査読有、2014、pp. 49-65。
④ Kazuisa Fujimoto, Globalization and Ethics for the Furture, Waseda Rilas Journal, vol.1, 査読有、2013, pp.165-170.
⑤ 藤本一勇、「虚構の一般意志」、現代思想 40-13、査読無、2013、pp.70-85。

〔学会発表〕（計３件）

① 藤本一勇、「デリダの反時代的テクノロジー」、デリダ没後１０年記念シンポジウム、2014 年 11 月 23 日、早稲田大学（東京）。
② Kazuisa Fujimoto 、 Deconstructive Humanities to come, The Sixth East Asian Humanities Forum 招待講演、2014 年 11 月 01 日、漢陽大学（ソウル）。
③ Kazuisa Fujimoto、Technologie, crise des “des Humanités” et literature à venir chez Jacques Derrida, International Conference: Commemorating the 10th anniversary of Jacques Derrida’s death 招待講演、2014年09月27日、上海交通大学（上海）。

〔図書〕（計３件）

① ジャック・デリダ著、藤本一勇訳『プシュケーI』、岩波書店、2014、総 729 頁。
② 藤本一勇、『情報のマテリアリズム』、NTT 出版、2013、総 242 頁。
③ ジャック・デリダ著、藤本一勇、立花史、郷原佳以訳、『散種』、法政大学出版局、2013、pp.3-275。

６．研究組織

(1)研究代表者

藤本一勇（FUJIMOTO, Kazuisa）
早稲田大学・文学研究科・教授
研究者番号：70318731